今治海キッズクラブ
倶楽部

海の人材育成の難しさ

～イベントを通しての考察～

日本財団
海と日本 PROJECT

1．海に関するイベントを開催し続けることで見えてきたもの

1）海と日本プロジェクトの大きな目標である「海とふれあう」ということはイベント等を行うことで達成されている

2）子どもさんらを継続的に育てる意味を見出し「今治海 Kids 倶楽部」を緩やかに始動

お母さんらとのヒアリングの中で

『楽しい』⇒『海への興味』⇒『学ぶ意志』⇒『仕事』につなげていくのかがわからない

という課題が見えてきた。

【アンケート・ヒアリング集約】

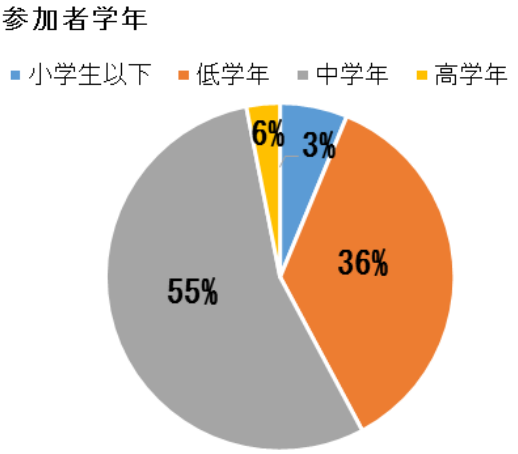
・イベントに参加するのは概ね小学４年生までの学年

・小学５年生～中学生は部活動でイベント等には参加しづらい

・父親や周りの人間が、海関係（造船・舶用）の仕事についてはいるが就労させていと持っていない

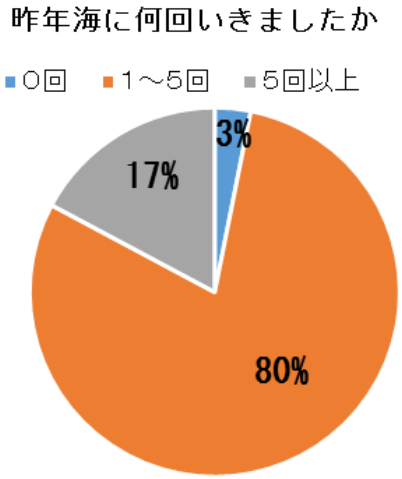
2．楽しかったという体験で終わらすには非効率

3. アンケート・ヒアリングからの考察



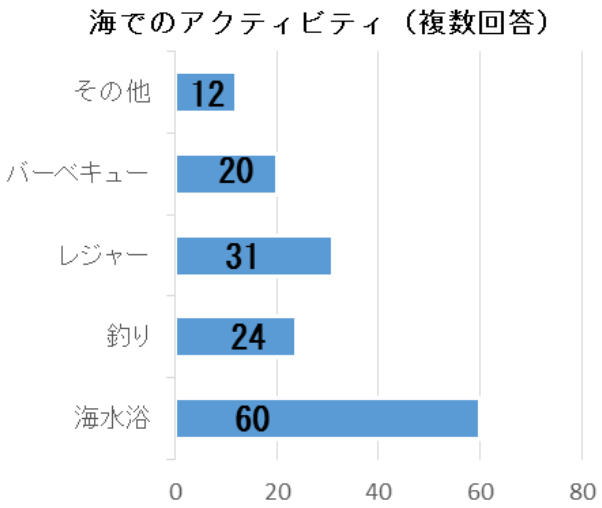
参加者の年齢を見ると小学校3・4年生が半分以上であり、
続いて小学校1・2 年生が続いている。
小学生 1 年生～4 年生で全体の 90%を占める状況となっていた。
【親御さんのアンケート・ヒアリング等】
・小学 5 年生以上では親と一緒に参加したがらない
・部活等優先する
・イベントがどうしても低学年対象になっているものが多く
　お兄ちゃんは参加したがらない
・学年の明記があれば参加しやすい

【アンケート・ヒアリングをうけて】
・小学 5 年生以上の子どもさんが興味を持つようなものを行わないと、興味の継続にはならない
・部活動との連携ができないか。
　　例えば（参加証みたいなものを発行し、部活を休む許可みたいなもの）



昨年海に行った回数は 1 回から 5 回が圧倒的に多い。
しかし、この中で 2 回ぐらいが多い。
海水浴は年に1回、ほとんどプール。海の街今治でもこの現状
【親御さんのアンケート・ヒアリング等】
・海で泳ごうと思ったら、設備の問題でどうしてもプールになる。
　影もなく、持っていくものが多い。
・子どもが楽しむような設備が海岸にはない。
・海で遊ぶには父親の協力が必要。
　　母親では海の楽しさは教えられない。
・海には楽しいものがないと思っている。

【アンケート・ヒアリングをうけて】
・海に楽しさを求めている方がほとんどである。親御さんにも海の環境問題といった認識はない
・海＝〇〇というものが今の子どもたちには少ない。このままでは「海を守っていこう」という気持ちがうまれるのか
・情報としての海上汚染等は目にし、耳にするが、心に入っていっていない。
・海に関心をもつ試みが必要。（例　ダッシュ海岸みたいな試み）



海に行ってしたことを聞いてみると、海水浴・レジャー・釣りというものがあり、バーベキューという海でなくていいものが多かった。

【親御さんのアンケート・ヒアリング等】

・その他のアクティビティは市外の海の施設であり、地元の海ではなかった。

・釣ってきた魚も「食べれるの？」ということを子どもさんから言われてびっくりした。
という声もあった。

・海に子どもだけで行くのは危ない

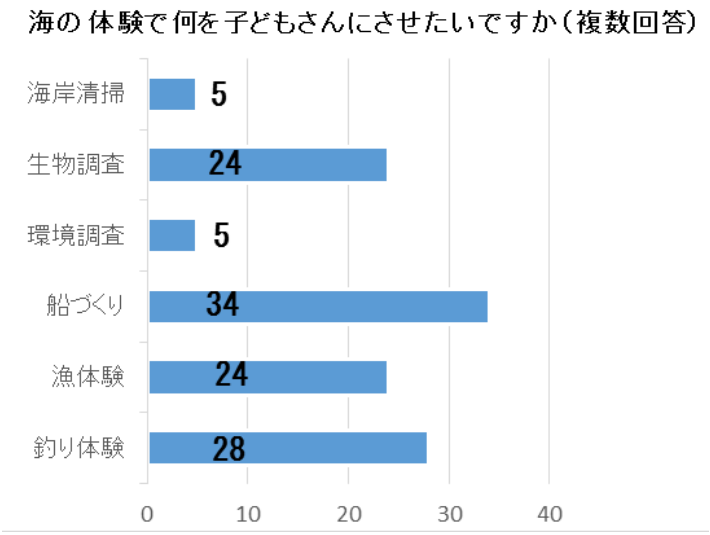
【アンケート・ヒアリングをうけて】

・子どもと海は思ったよりかけ離れて行っている

・場所として遊びに行くのは、遊具のある公園。

・ハード面、ソフト面で海岸は遊び場所でなくなっている。

・海で捕ったものをその場で食べるという体験が皆無



造船の街ということもあり、船作りをさせたいという親御さんも多かった。
魚・生物等子どもさんに興味を持ってもらいたいと考えている。

【親御さんのアンケート・ヒアリング等】

・子どもを海に連れて行くPTA活動もなくなり、キャンプも校庭キャンプになっている
「子どもさんを海に連れて行こう」という大人も減っている。

・学校での調査とイベントなどが、かけ離れている。学校で海岸に行っても専門の方でないので難しい。

【アンケート・ヒアリングをうけて】

・親御さんのニーズはある。しかしニーズと体験がスムーズに結びついていない。

・体験等行っている団体は多いが、親御さんのニーズと結びついていない。

・テーマパーク、商業施設へ行くより、海での学習等には興味がある。「その体験が何に繋がっているのか」という答えが親御さんまかせになっている。

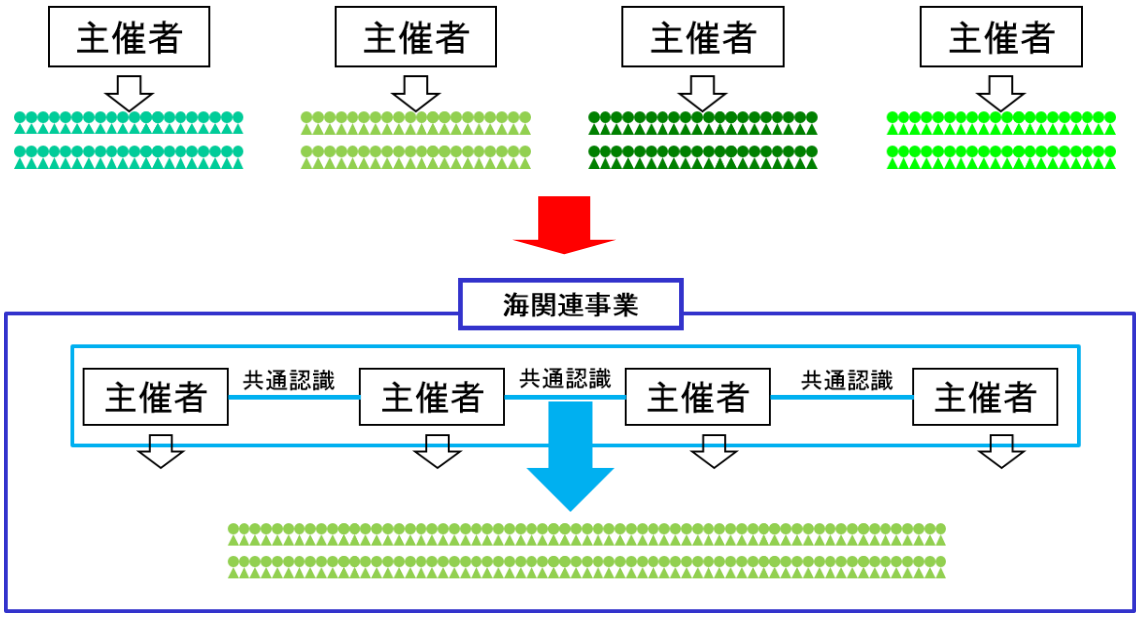
4. 問題点

（1）共通認識の創造

公のイベントについて「団体（主催者）の仕事（事業内容）を知ってもらう」という広報に、人材育成という観点が求められます。その場合、参加者（子どもさん）の興味・ニーズを掴んでおかないと一過性のものとなっている。

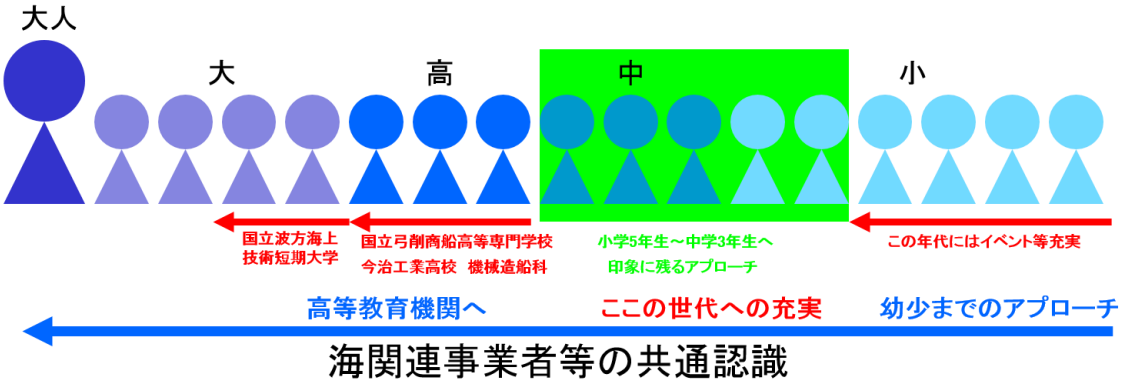
また同じ業態の中で意識を統一することにより、有効且つ参加者の興味も深化していきます。

参加者数（量）を指針とするのではなくリピーター（質）を指針とする時代が求められている



（2）興味の継続

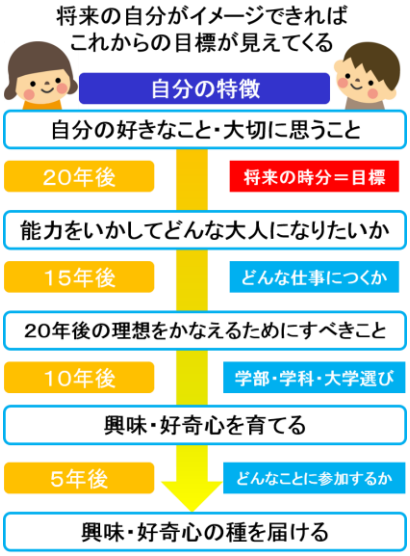
イベント等を訪れる年代は小学4年生までが多い。それ以上の世代が興味をもち、高等教育・大学等に以降してもらえる仕組みが不可欠。



（3）将来の目標

公益財団法人日本生産性本部が行った、平成30年度新入社員「働くことの意識」調査結果「会社を選ぶとき、あなたはどういう要因をもっとも重視しましたか」という質問に対して「自分の能力、個性が生かせるから」（31.0%）「仕事が面白いから」（19.0%）、「技術が覚えられるから」（10.0%）の順だった。

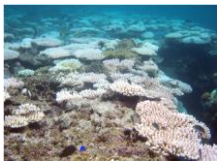
自分の能力や個性、面白いと思うものはいかにして形成されるのかを考えると、幼少期からの興味や好奇心が大きく作用します。この興味・好奇心を年代別に系統だて届け、育てることが必要。



（4）深刻化する海の問題の共有

海は地球のいのちの世界を支えるだけでなく、その場所自体が、一つの大きな生命圏となり、多くのいのちが生活しています。人間が海の多様性の損失にもたらす影響は様々あります。特に人間活動の活発な沿岸域においては、いろいろな要因が複雑に関わり合い、環境の喪失の原因となっています。これらも含めた問題共有そして人材育成が急務となっている。

１．生息環境を劣化させる物理的改変　２．海洋汚染　３．漁業に関する問題
４．外来種　５．気候変動の影響



（5）地域独自のカリキュラム

今治近隣には、国立波方海上技術短期大学、愛媛大学、国立弓削商船高等専門学校、今治工業高校等海に関する教育機関があります。しかし、海の担い手として志望する生徒は限られております。

「地域の人材を地域で育てる」という環境はあり、高等教育までのアプローチを明確化していくことにより、一貫した育成プロセスができあがります。

幼少期（～4 年生）には興味・好奇心を育てる時期として既存のイベント等に参加

小学 5 年生～中学 3 年生のイベント参加が難しい年代には教育機関等との連携により興味の継続

高等教育、大学の学びの時代へ繋ぎます。

5. まとめ

<u>海に関する興味を継続させ、人材と育成するために</u>

・海関連の事業との連携強化（企業イベントに留まらず、地域の海岸清掃・学校の授業との連携）
・小学校5年生～中学生対象の試みの強化
・海の人材育成のためのカリキュラムの作成
　楽しさ（想い出づくり）－経験（問題を含めた解決の模索）－学び
・イベントの意義を子どもだけでなく、大人も共有できる工夫
・海岸の環境問題でいえば、DASH 海岸みたいなアプローチも必要
　継続できる組織の運営方法・支援方法

これらを踏まえたうえで、これからの事業を推進する。